東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

バニュマス地方の芸能に見るアイデンティティの混在と変容

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-06-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 増田, 久未, Masuda, Kumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1292

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

バニュマス地方の芸能に見るアイデンティティの混在と変容

増田　久未

Clarification of the mixed identities and its change of performing arts in Banyumasan region

Kumi MASUDA

１．研究目的と対象

「多様性の中の統一」を国是とするインドネシアは、民族も文化も非常に多種多様であり、地方色豊かな芸能が現在も各地に息づいている。中でも中部ジャワ州スラカルタ（ソロ）は、マタラム王国時代から続く王宮の栄華を象徴するかのような青銅楽器の合奏ガムランが発展した中心地である。中部ジャワ州スラカルタのガムランは現在もインドネシアの代表的な伝統音楽として継承されており、またその影響を受けて独自に発展した芸能のある地域も存在する。そうした地域の一つとして挙げられるのは、スラカルタより西へ向かった中部ジャワ州の端にあるバニュマス地方である。

本研究は、インドネシアの主流となっている王宮文化の一つであるガムランで演奏される音楽、及びその影響を受けた地方の音楽を比較することで、それぞれの文化の担い手（演奏家）のアイデンティティがどのように混在、変容しているのかを探ることを目的とするものである。中でも今回対象とするのは、中部ジャワ州スラカルタの王宮を中心に発展したガムランで演奏される音楽、及び同州バニュマス地方の伝統音楽に定める。インドネシアの主流とも言えるスラカルタの伝統音楽を「モデル」とし、その音楽が周りにどのように影響を与え「変容」していったのか、今回はバニュマス地方の伝統音楽を挙げ、検証する。

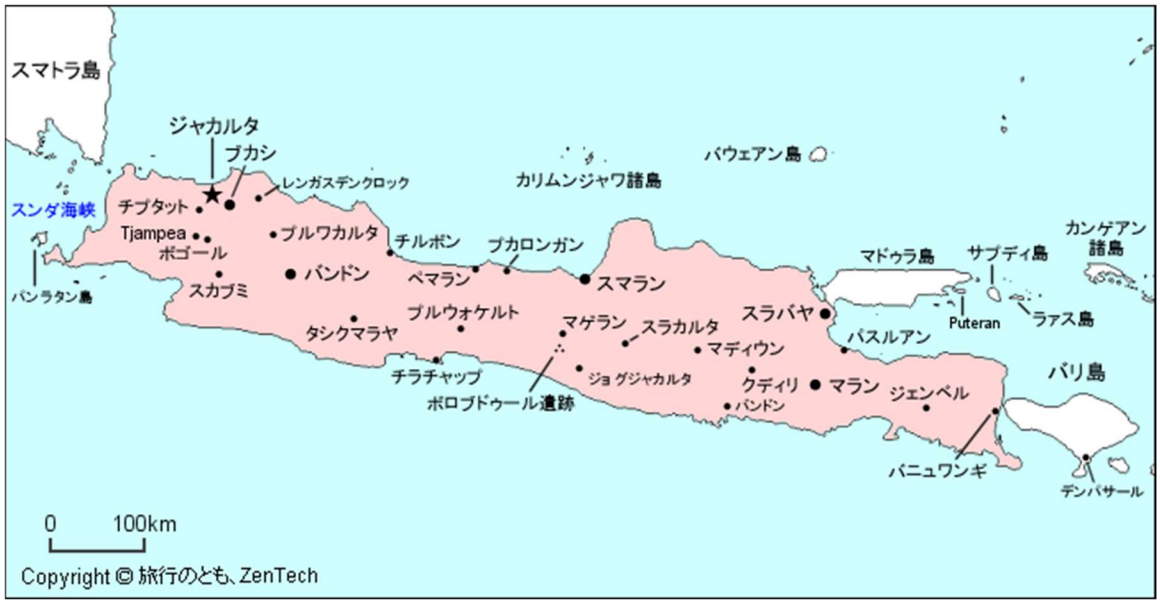

図１：ジャワ島地図

２．ガムラン Gamelan とカラウィタン Karawitan

ガムランは「ガムル gamel＝叩く」を語源とする青銅打楽器群とそれによって奏でられる音楽の総称である。特にジャワ、マドゥラ、バリ、カリマンタン、スマトラ等ジャワ人が移住した先でも発展したものを示す。このことから、ガムランはとりわけ「ジャワ人」の生み出した伝統音楽に端を発すると考えられる。ジャワ島中部ジャワ州にあるスラカルタは、16 世紀頃に栄えたマタラム王国時代から続く王宮のある古都であり、ジャワの宮廷文化、伝統芸能の中心地として発展した。現在一般的とされるジャワガムランの合奏形態も、マタラム王国時代に完成したとされる。

ジャワの音楽を指すカラウィタン Karawitan という用語があるが、これは特にガムランで演奏される伝統音楽を言う。これに対しムシック Musik は、一般にガムラン以外の楽器で演奏される音楽を指している。また、カラウィタンは民俗音楽 Seni Rakyat とも区別される。こうした用語の区別からも、王宮のガムランを中心として発展した伝統音楽カラウィタンは、ジャワ人にとって特別な、誇りの象徴となっている様子がうかがえる。

３．バニュマス地方の伝統音楽

次に、バニュマス地方の伝統音楽について述べる。バニュマス地方は、中部ジャワ州の最西端に広がる地域である。現在バニュマス Banyumas、チラチャップ Cilacap、バンジャルヌガラ Banjarnegara、プルバリンガ Purbalingga の四つの県 Kabupaten を中心とする。スラカルタのガムランとは全く性格の違う独特の芸能が盛んなこの地域で代表的な音楽の一つに、チャルンが挙げられる。

チャルンは、竹で作られた楽器であり、主に、ドゥンドゥム Dhendhem（スレンテム Slenthem）、クノン Kenong[1]、ガンバン・バルン Gambang barung、ガンバン・パヌルス Gambang panerus（1〜3 台）、ゴング Gong、クンダン Kendhang といった楽器で構成されている。これらの楽器の演奏上の役割を簡単に説明すると、まず、ドゥンドゥムは、曲の骨格旋律を演奏する。クノンは、スラカルタのガムランで言うクノンとクト Kethuk にあたる役割を一つの楽器で演奏する。ガンバン・バルンとガンバン・パヌルスで、対になってインバル奏法を行う。また、ガンバンは四台で演奏されることもあり、その場合は３台がパヌルスとなるが、３台ともそれぞれ異なる奏法を行う。

以上から、チャルンの楽器の名前と奏法に、スラカルタのガムランと共通するものが多いことが分かる。チャルンは 20 世紀に入ってから誕生した比較的歴史の浅い芸能であること、また多くの人にガムランを模倣していると考えられていることから[2]、用語や奏法に関しても、チャルンの発展の過程で借用が行われたと推測できる。

---

[1] クト・クノンとも呼ばれる。

[2] Sutton, *Traditions of Gamelan Music in Java*, p. 73.

図２：中部ジャワ州地図、赤線で囲まれた地域がバニュマス地方

４．バニュマスの人々のアイデンティティ

バニュマスの人々の特色は、cablaka＝あるがまま・jujur＝正直・terbuka＝開放的であると言われる。そうしたバニュマスの人々の特性は、影絵芝居ワヤンの登場人物の一人であるバウォール Bawor にも表れている。バウォールは、ポノカワン Ponokawan[3]の一人であり、スラカルタやジョグジャカルタのバゴン Bagong と容姿見た目はほぼまったく同じであるが、バニュマスでは長男として登場し、ワヤンの中でバニュマス語を使って話す。バウォールに描かれた性格は、バニュマス人そのものとしてとらえられており、バニュマスでも最も人気な登場人物である。

サットンは、王宮のある地域と無い地域との間での人間的な特徴の違いを明確に表しており、またこの違いからバニュマスの人々の素朴さ、寛容さがよく見て取れる[4]。さらに、サットンは、こうしたバニュマスの人間的特徴が音楽にも表されていることを指摘している[5]。「滑稽さ」は、バニュマスの音楽を特徴づける重要な要素となっている。また、「滑稽さ」に加えて、サットンは「にぎやかさ」もバニュマスの音楽の特徴として挙げている[6]。「滑稽さ」と「にぎやかさ」は、バニュマスの音楽に必要不可欠な要素であると言えよう。

以上のようなバニュマスの人々のおおらかとも捉えられる特徴がある一方で、田舎者である自分たちを蔑むような姿勢も見られる。リスロフは、バニュマスの人々は「自分たちを醜い、粗野な田舎者で、下級なジャワ人であるとみなしている」[7]と言及している。また、

---

[3] ワヤンの物語『マハーバーラタ』に登場する道化たちの総称。父スマル Semar、長男ガレン Gareng、次男ペトル Petruk、三男バゴン（バニュマスではバウォール）の親子全員を指す。
[4] Sutton, *Traditions of Gamelan Music in Java*, p. 70.
[5] Ibid., p. 71.
[6] Ibid., p. 93.
[7] Lysloff, *Srikandhi dances lengger*, p. 104.

サットンは、「ソロの伝統はバニュマスで賞賛されている一方、バニュマスの文化にとって脅威とみなされている」[8]と述べる。バニュマスの人々は元来このように自分たちを蔑視し、劣等感を持っていた。中部ジャワ州の王宮のある地域と比べて己の文化を低俗であるとみなしているのと同時に、王宮の文化に憧れを抱いているのである。

またそれに対し、約 50 種類もあるというバニュマス地方の伝統芸術が徐々に廃れていってしまい、その土地の文化が失われ始めてから、「プンギニョンガン penginyongan」というバニュマス地方で生まれ育った人だけを指す言葉が生まれ、広まっていったという。王宮の文化に対する憧れと地元の文化への蔑視というアイデンティティの葛藤がありながらも、失われていく土着の文化に対する危機感を持つことにより、地元文化への誇りを失ってはならないというバニュマスの人々の意志がここに見られる。

５．スラカルタとバニュマス地方の両者の伝統音楽に見る関係性

曲についても、スラカルタやジョグジャカルタの曲を模倣したものであると考えられるものがいくつかある。例えば、《ランバンサリ・ケニョール Lambangsari Kenyol》《グヌンサリ・カリバゴラン Gunungsari Kalibagoran》《ベンドロン・クロン Bendrong Kulon》などの曲名から、それぞれスラカルタやジョグジャカルタの曲のレパートリーにある《ランバンサリ》《グヌンサリ》《ベンドロン》との関係性が予測できる。

この他にも、このような王宮のレパートリーを彷彿とさせる曲がいくつかある[9]。曲そのものは元の曲に似ていたり、同じ箇所がある、というわけではなく、明確な関連性を証明できる要素はないのだが、少なくとも王宮のレパートリーを意識してつけられた名前である、と推測できるだろう。また、全く同じ曲名をそのまま借用するのではなく、《ランバンサリ・ケニョール》のようにその曲名に言葉を加えて固有性を出している。曲それぞれにバニュマス地方のアイデンティティを見出だしていると同時に、王宮のガムラン音楽に敬意を表しているとも考えられよう。

表１：バニュマス地方の曲名とスラカルタの曲名との比較

曲名	意味	スラカルタの曲
エリン・エリン・バニュマサン Eling-eling Banyumasan	バニュマス風エリンエリン	エリン・エリン Eling-eling
グヌンサリ・カリバゴラン Gunungsari Kalibagoran	カリバゴール[10]のグヌンサリ	グヌンサリ Gunungsari
ランバンサリ・ケニョール Lambangsari Kenyol	ちょっとおかしなランバンサリ	ランバンサリ Lambangsari
ベンドロン・クロン Bendrong Kulon	西のベンドロン	ベンドロン Bendrong

[8] Sutton, *Traditions of Gamelan Music in Java*, p. 70.
[9] サットンは、バニュマスの曲のレパートリーを目録化し、ジョグジャカルタとスラカルタのレパートリーとの類似点、相違点などの分析を行っている。
[10] バニュマス県にある村の名前。

６．曲の構成に見られる関係性

PUSPAWARNA, Ktw. Sl. Myr.

Buka:	61	2321	3312	.126
‖	.2.3	.2.1	.3.2	.1.6
Lik:	..6.	2321	3265	1653
	..32	5321	.3.2	.126
	.2.3	.2.1	.3.2	.1.6 ‖

図３：《プスポワルノ》数字譜

Gendhing Banyumasan Bentuk Ketawang

GUNUNGSARI KALIBAGORAN, Sl. Myr

Buka:	..61	2321	3353	.126
Omp:	.2.3	.2.1	.2.3	.1.6]
Ciblon:	1632	5653	6132	6321
	3632	5653	5321*	3216]
Gobyog:			* .3.2	.2.62
	22.22.	22.222	6123	6532
	123..	...3	.5.3	.5.3
	.5.3	.5.3	.6.5	.3.2
	.3.2	sid .5.3	.2.3	.2.1
	.5.6	.1.6	.3.5	.3.2
	.5.6	kw .1.6	.1.6	.5.3
	.5.3	.5.3	.2.3	.2.1
	~~.3.5~~ ·2·1	.3.2	.3.1	.2.6]

図４：《グヌンサリ・カリバゴラン》数字譜

では、スラカルタとバニュマス地方の音楽で影響、借用が起きているのは、楽器や曲の名称だけであろうか。ここで、スラカルタの王宮を中心に伝わる《プスポワルノ Puspawarna》と、バニュマス地方に伝わる《グヌンサリ・カリバゴラン》のそれぞれの曲の構成を比較し、相互の影響が見られるか検証したい。

図３、図４の二つの数字譜を見ると、まず《プスポワルノ》の一行目「.2.3 .2.1 .3.2 .1.⑥」と《グヌンサリ・カリバゴラン》の一行目「.2.3 .2.1 .2.3 .1.6」が酷似していることがわかる。また、《グヌンサリ・カリバゴラン》の Ciblon の部分「1632 5653 6132 6321 3632

5653 5321 321⑥」、Gobyog の部分のゴングの数字（◯で囲まれた数字）を見ると、先述の一行目の骨格旋律をもとに曲が構成されていることがわかる。また、Gobyog に入るまでは雰囲気も落ちついており、Ciblong の手組もソロのものとほぼ同じであることから、原曲 Puspawarna を意識していると考えられる。

このように、音楽的にもバニュマスの曲のソロからの借用がされていると考えられるものが存在するということがわかる。《グヌンサリ・カリバゴラン》に関しては、必ずしも《プスポワルノ》をもとに作られたという証拠があるわけではないが、筆者は、バニュマスの音楽家が「(《グヌンサリ・カリバゴラン》は)《プスポワルノ》をもとにしている」と発言しているのを耳にしたことがある。このことから、少なくともバニュマスの音楽家の間ではソロの音楽からの借用をしていることを認めていると考えられるだろう。

７．まとめと今後の展望

以上、スラカルタの王宮を中心とするカラウィタンとバニュマス地方の伝統音楽チャルンについて、特にバニュマス地方の音楽に主軸を置き、インドネシアの主流とも言えるカラウィタンの影響をどのように受け、それが音楽や演奏家たちのアイデンティティに反映したのかを検証してきた。バニュマス地方の演奏家は、カラウィタンを一つの「モデル」として憧れを持ち、借用し混在させることによって自分たちの音楽をより発展＝「変容」させてきた。ある地域の人々が、他の地域の音楽、いわば「外」の音楽を寛容に受け入れ、地元の土着の音楽に融合させ新たな音楽を生み出すという例は、バニュマス地方だけでなく、他のインドネシアの地域、またインドネシア以外の国でも多数例があることは自明であろう。バニュマス地方の音楽で特筆すべき点は、取り入れる音楽とそれを取り巻く人々、地域、文化全体に対する畏敬の念を抱いており、意識的に借用しているということであろう。また、単なる憧れのみならず、自分たちの音楽に対して蔑視するかのような姿勢を見せる点もありながら、一方で失われつつある土着の文化芸能に対する危機感も覚えているという、アイデンティティの面では非常に複雑な渦中にあるとも捉えられる。

そもそもバニュマス地方の人々は、「インドネシア人」「中部ジャワ州の人間」「バニュマス人」という３つのアイデンティティを併せ持つ。そこには劣等感や憧れ、誇りといった様々な民族意識の葛藤があり、それがバニュマス地方の文化として表象されている。メインストリームとなるスラカルタの王宮文化の一つとしてのカラウィタンと、同じ中部ジャワ州でありながらも地方の田舎の庶民文化であるバニュマス地方の音楽との関係性を検証することにより、多様な民族、文化が混在するインドネシアの中での音楽文化に関する「モデル」と「変容」のあり方の一端を垣間見ることができたと言えるだろう。

本稿は情報量も考察も限られた中での検証となったため、「変容」がなぜ、どのようにして起きたのか、バニュマスの人々の王宮に対する敬意と地元の文化に対する劣等感との間で創造される伝統、アイデンティティについて再検証する必要がある。とりわけインドネシアはオランダ統治下からの独立後の文化政策、地域観光政策などによる圧力、影響が非常に大きいため、それがどこまで及んでいるかが視点の一つとして挙げられる。以上のような点を今後の課題とし、研究考察を進めていきたい。

［参考文献］

Kuwat, Waluyo. *Gambangan Calung Ki Namiardja Dalam Penggarapan Gending-gending Banyumasan.* Yogyakarta: 1993.

Kuwat, Waluyo. *Kesinambungan Benang Merah Bongkel, Buncis, Krumpyung, dan Calung Banyumas*. Yogyakarta: 1998.

Lysloff, Rene T.A. “Rural Javanese ‘Tradition’ and Erotic Subversion Female Dance Performance in Banyumas(central Java)” In *Asian music* 33/1(Fall/Winter 2001/2002): 1-24.

Lysloff, Rene T.A. *Srikandhi dances lengger*. (1st ed., Leiden, 2009) 1st ed. Leiden: KITLV Press, 2009.

Sutton, R. Anderson. “Musical Pluralism in Java: Three Local Traditions” In *Ethnomusicology* 29/1 (Winter 1985): 56-85.

Sutton, R. Anderson. “New Theory for Traditional Music in Banyumas, West Central Java” In *Pacific review of ethnomusicology* 3(1986): 79-101.

Sutton, R. Anderson. “The Crystallization of a Marginal Tradition: Music in Banyumas, West Central Java” In *Yearbook for Traditional Music* 18 (1986): 115-132.

Sutton, R. Anderson. *Traditions of Gamelan Music in Java: Musical Pluralism and Regional Identity*. (1st ed., Cambridge, 1991) digitally printed version. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.

増田久未「ジャワ島バニュマス地方の伝統音楽––『小さな文化』としての地域的アイデンティティの構築––」卒業論文、東京藝術大学、2014.

「インドネシア」、『ニューグローヴ世界音楽大事典』東京 ： 講談社、1993、第 1 巻、83〜120 頁。